

くまもとアートポリス シンポジウム報告 八代市

街づくりにつながる建築活動に



1990年6月27日、八代市厚生会館において、第三回目のくまもとアートポリス・シンポジウムが開催された。

伊東豊雄設計の市立博物館建設が大詰めを迎えていることもあってか、開場前から専門家に混じって大学生や高等専門学校の学生も多数詰めかけ、アートポリスへの地元に関心の高さを伺わせた。

シンポジウムに先立ち、伊東氏の「環境をつくる建築」と題する特別講演。「風の建築」というコンセプトの説明にはじまり、実際の建築作品やプロジェクトをスライドを交えて熱く話を展開した。「環境をつくる建築」は建築が周囲の環境に働き掛ける姿勢をあらわしている。建築家が単体の建築から一歩踏み出して、街へそして自然の中に飛び出した。都会的な建築家としてイメージされることの多い氏は今まで一貫して軽く、透明な建築を作ってきた。横浜「風の塔」や、レストランノマドはその代表的な例。都会の若者がもっとも都市の活力を受け取る夜の賑やかさを合わせ持つ建築と言えないこともない。

しかし、スライドで見た最近作品では、一転して昼間の陽光溢れる中にこそふさわしいものばかり。すなわち、札幌郊外に建てられたビール工場のゲストハウスやフランクフルトに計画中の幼稚園、そして今回の八代市博物館など、すべて建築が芝生を貼ったゆるやかな地形と連続してデザインされている。

人工的なパンチングメタルや光といった材料で周囲の環境に慎重に馴染ませる従来の氏の作風から見ると、一見穏やかで、肩肘を張ったところが見られない。ゆったりと

して心休まる環境をつくりだすという手法だ。ゆっくりと周囲の環境に広がっていく。

その広がり方はこんな具合にである。「こんな地形に似合うような建物が町中に広がったらいいな」と、この芝生に寝ころんだ一般の人たちもだれでも考えることだろう。これは建築家や専門家だけに通じる理論ではない。また商店街の活気のみを目指すのではない。みんなが出来上がった建築に参加できる、そしてそこから始まる街づくりを共に考える、そんな広がり方をこの建築は目指しているようだ。

さてシンポジウムにはパネリストに越沢明氏(神奈川県庁)、桂英昭氏(八代工専)、鶴山崇氏(八代市役所)の3氏。コーディネーターに八束はじめ氏(くまもとアートポリス事務局ディレクター)を迎えた。「街の創造と再生——くまもとアートポリスとまちづくり」と題して、各講師のプレゼンテーション、続いてディスカッションが持たれた。まず越沢氏の横浜をはじめとする街づくりの例を解説。それは横浜市役所前道路の広場化から始まった。人通りの多い歩道を拡張し、駅前の広場と一体化させ、駐車場を植栽によって歩行者の視界から消してしまうというものだ。この最初の試みは市民の評判によって力を得たものである。元町や馬車道通りなどが、カラー舗装化され、ストリートファニチャーがデザインコントロールされた。

また海岸沿い山下公園のメインストリートの整備については、民間協力による新規建築の際の壁面後退が効を奏した。これは壁面後退を条件に容積率の割増をボーナスとして与えるというもの。歩道を拡張することで、新しい建物の前がポケットパーク化し、かえって集客効果が見られたという。ここを訪れる人たちもこの恩恵に浴するわけである。「若い女の子が来る街にしないといけない」と結んだが、確かに行政からの視点、地元の意見に加えて実際の街の活用者である若者の心をつかまなくては、本当に活気ある街とはいえない。

一方、桂、鶴山両氏は日頃の活動の成果を報告。熊本県内、および八代市の街づくり

の例を挙げた。各地で始まったばかりのまちづくりであるが、起爆材となる建築の絶対量がまず必要と桂氏は訴えかけた。手作りの街づくりを拠点に、より大きな面的な広がりにつなげていきたい。そのためにはもっと街づくりに寄与する建築の量を増やしたいという訳だ。

オブザーバーとして発言を求められた伊東氏は「八代の人たちが街の必死の再活性化を目指している。その熱意に建築家として最善を尽くしていきたい」と発言すると、会場からは拍手が沸くという盛り上がりを見せた。

シンポジウム後は、会場のとなりにある八代市立博物館の建設現場を視察しようと、シンポジウム会場から100名を超える参加者がこれに流れた。伊東建築設計事務所の担当者がまだ打ち上がったばかりの2階スラブの上でメガホン片手に建築の説明を。

「カフェテラスには若者がデートをできる場所を」というのは市役所の鶴山氏の博物館に対する要望であったが、現在、鉄筋がそこかしこに飛び出すその場に立つとなるほど市内が一望でき、街づくりの主要な拠点になることは間違いないようだ。やがては若者たちがコーヒーカップ片手に、ここから生まれ育った街を眺め、自分たちの街の将来を語り合う場所となるだろう。

1992年に予定されている「くまもとアートポリス'92」では八代市も会場の一つに予定されている。今回のシンポジウムではアートポリスをきっかけに建築家と市民とががっちり手を組んで街づくりをすすめてが必要であることが、参加建築家、一般の参加者の間で強く認識されたようだ。



●11月末、熊本市の熊本北警察署がオープン。すでに外観を現し、町の話題となっている。(次号記事)
●建設にまつわるエピソード、計画地周辺の話題などを、くまもとアートポリスニュースでは取り上げていきます。ご意見、ご感想をお寄せください。

- 八代の“ある”まちづくり
- 熊本市営団地設計建築家—緒方理一郎氏逝く
- くまもとアートポリス参加建築家に聞く
—トム・ヘネガン アンド インガ・ダグフィンズドッター

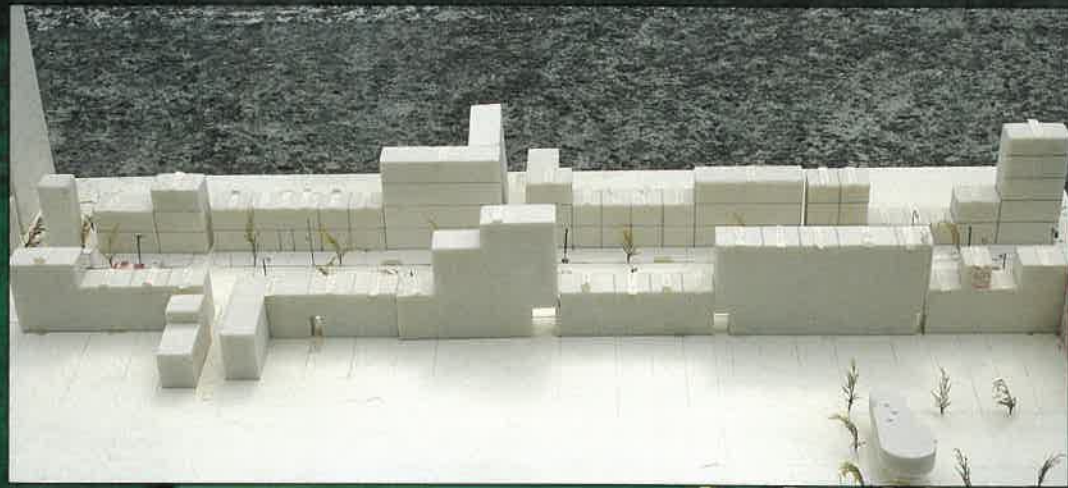


●発行-くまもとアートポリス事務局
熊本県土木建築課内 熊本市水前寺6-18-1
tel 096-383-1111 (内線6220 / 6221)
●編集-くまもとアートポリスコミッショナー事務局
東京都渋谷区渋谷2-5-7 本間ビル
建築・都市ワークショップ内 tel 03-407-4753

全貌現わす八代市立博物館 内部から見た屋根骨組み(下) 設計/伊東豊雄

●プロジェクトの散歩道-----八代市立博物館の周辺

カラオケで盛り上がってまちづくり -----八代通町商店街



通町共栄会のメンバーが自分たちでつくった商店街の模型

2



昨年のクリスマス、通町共栄会と伊東建築設計事務所スタッフ総動員で光ファイバーのクリスマスツリーを飾った

●肉屋さんの2階に行ったら商店街の模型が出来上がっていた----伊東豊雄

八代市は人口10万、県内第2の都市。製紙、ウイスキーなどの工場を持ち、いぐさの産地として全国に知られている。近年、新たにヤマハのボート工場の進出や八代外港を結ぶ産業道路の整備、九州縦貫道の八代-人吉間の開通により、ダイナミックな動きが始まろうとしている。市の中心部ではかつての八代城の石垣の内側が公園として使われ、外堀が散策の場として整備され、旧松井家の数寄屋風の庭園と共に八代の歴史・文化ゾーンとして親しまれている。

さて、くまもとアートポリスプロジェクトである八代市立博物館はこのゾーンの中心部、松井家の向かいに建設が進められている。

この新博物館の設計者である伊東豊雄氏は2回のシンポジウムをはじめとして、博物館が建設中でありながらも、様々な形で地元の人々との交流を深めている。

ここで紹介する通町商店街との協同で行なっているまちづくりは、そんな交流の中から生まれたものだ。くまもとアートポリスプロジェクトが県内に核となる建築をつくり、そのデザインや建設のプロセスがまちづくりに影響を及ぼし面として広がっていくという良き例である。

◎

「通町の肉屋さんの2階に通されたら目の前には商店街の建築の模型があるんです。自分たちで作ったというから、またびっくりしてしまいました。」

伊東さんが通町商店街の人たちと盛り上がり、いくつかのプロジェクトに関わるようになったのは、商店街の人たちの商店街の存続をかけた熱意があったからに他ならない。

「通町商店街」は八代城址、八代市立博物館前の通りの延長上にある。現在は道路の拡幅により自動車の交通量が増え、かつての商店街としてのまとまりに欠けている感がある。この通りより南側に位置し、長大なアーケードを備える本町商店街*に人出と活気を吸い取られてしまっているようだ。

そのうえ、建設省のすすめるレインボー・プロジェクト*が旧国鉄球磨川駅跡地と本町アーケード商店街の再開発が中心とされ、通町は対象から外されている。

「レインボー計画に期待をかけていた私らにとって、これからは自分たちで何とかするしかない、思いましたね。」当時のことを森本さん(通町共栄会会長)はこう話す。

「市内にマンションの計画があることを知って、私らは逆にこれを誘致したんです。だって40世帯がここにすれば120人の人間がこの商店街を歩き回ることになるでしょう。これが通りの活気に繋がると思うんです。それから県の緑化事業があったとき、これをなんとか通町の活性化に繋

3



4

5

げられないかと考えて、熊本、福岡、人吉とカラー舗装の例などを見て回ったんです。それに八代の県の八代土木事務所には毎日通いましたね。最初はみんな私のことを気にとめなかったようですがなかったのが、そのうちにお茶まで出してくれるようになったんです。どうやら予算を付けて下さった。でも、そのつぎに何をするかというところで、悩んでしまった。」

そんな時に市立博物館の設計者である伊東さんとの出会いがあった。「通町には金はありません。でもどうにかなりませんか、とにかくぶつけてみたんです。その時伊東さんが言うには、これだけ落ちぶれていたらかえってやりやすいとね・・・」

商店街の起死回生の覚悟が建築家に通じたのかも知れない。その意気込みに同調した伊東さんは博物館の打ち合わせに来るたびに議論の場となっている共栄会の幹事宅、つまり肉屋さんの2階、まちづくりのミーティングルームに出向いた。時に議論の場はカラオケバーにまで持ち越され、夜更けまで続けられる。

そして、行動は起こされた。昨年の12月クリスマスの日。通町の街路樹に共栄会のメンバー、伊東事務所のスタッフも動員して光ファイバーを取付けた。仮設の街路燈が通りを飾ったのである。

このことはやがて常設の街路燈の設置へと実を結んだ。伊東さんの設計によりユラユラ揺れる街路燈のデザインが終わり、制作へと移っている。通町の脇にある観音堂を町のギャラリーにしようとする計画も、まず伊東さんに相談された。通町のコミュニティセンターに変身させようとする計画だ。小さな展览会や、コンサート、祭りの拠点となったりするスペースだ。そしてもちろん、まちづくりの寄り合いをする基地だ。現在、このギャラリーの計画は来春のオープンを目指して建設中である。

「最初は伊東先生とお呼びしてました。でも八代においでいただいて、夜通しカラオケをうたっているうちに、なんでも言わせていただくようになりました。今では伊東さんって呼ばせてもらってます。私らもまちづくりをやればできるんだってことを教えて下さったんです。」

● 9千匹のカッパ・プロジェクト

今年の7月八代市の市制50周年の記念講演会で伊東氏が八代の人たちに向かってこんな提案をした。「八代はもともと水と縁が深い。堀割りを町中に巡らして、水によるまちづくりをしたらどうか。そして八代の9千匹のカッパ上陸伝説に倣って、市内に9千匹のカッパをつくろう!」と。これまでまちづくりの話しにいまひとつ乗らなかった八代の普通の市民もこの話にはすぐ反応した。

「家の屋根の上にカッパが昼寝をしていたり、工場の煙突をよじ登って」

04



現在建設中の通町ギャラリー(設計/伊東豊雄)と旧観音堂(下左)
通町郵便局前の国際通話のできる電話ボックス(下右)

●9,000匹のカップパが町中の通りや屋根を歩き回っていたり・・・



●八代市立博物館および通町商店街



●八代のまちづくり

「レインボープロジェクト」
旧球磨川駅跡地の再開発をきっかけとして、本町アーケード街を中心とする市街地の整備を狙うもの。駅跡地には公共文化施設、アミューズメント施設、大規模駐車場等が計画されている。
「本町アーケード」
720メートルもの長大さを誇り、「C計画」や数年前に県民文化祭で企画された「タウンギャラリー」の連続開催で顕著している。
「中心市街地のポケットパーク整備」
市役所前から本町通りまでの「こいこい通り」は昨年「緑と水のプロムナード」(1989年度熊本県景観賞)や古い庭園を利用した買物公園「本町緑地」などの整備が進められている。本町アーケードや通町商店街がヨコの通りを形成するとすれば、これらはタテ通り。タテヨコのネットワークによるまちづくりが準備されている。
「くまもとアートポリス'92」
1992年に開催されるくまもとアートポリスの一つの会場が八代市となる。市民参加のさまざまなまちづくり関連事業が計画され、構想段階からの参加者、アイデアが求められている。

いるカップパがいたり、町中にカップパが遊んでいればいい。自分たちの町を見直すきっかけになればと思うんですね。」伊東さんはカップパづくり構想をこう話す。

これを受けてすでにカップパ計画実現の動きが通町で起こっている。通町でメガネ屋さんは、店の改装の機会を捉えて、さっそくショーウィンドウ回りにカップパをはべらそうとしている。そして伊東氏を招いた肉屋さんは、冷凍庫の流水を流す口にカップパを遊ばせようというのである。たとえば沖縄の屋根には表情豊かなシーサー(動物に姿を変えた守護神)がのり心な、風景を形成している。山に抱かれ、海に開かれた八代の町の家並に9千匹の河童が遊んでいることを想像するだけでも愉快ではないか。現在に伝えられた河童伝説と、風土をうまく八代のまちづくりの中に継承させていけないだろうか。

今回取材した「通町商店街」はまだまちづくりの動きが始まりかけたばかり。けっして大規模な資本の投入があったわけではない。商店街の人々が協力してまちづくりに取り組んだことが、次なる行動を呼び起こした例である。このような例は県内の各所に起こっていることは言うまでもない。

●このレポートで取り上げた通町商店街の整備は県商工政策課、八代土木事務所道路維持課、管理課、八代市商工観光課、建設部、九州電力、NTTなどのまちづくりに対する情熱によって進行中であることを付け加えておきたい。(編集部)

●シリーズ-----4

くまもとアートポリス参加建築家に聞く

トム・ヘネガン アンド インガ・ダグフィンズドッター

草地畜産研究所牛舎設計者



草地畜産研究所の基本設計模型でデザインの検討をするトム・ヘネガン(左)、インガ・ダグフィンズドッター(右)氏

●ヘネガンさんのこれまでの日本と関わりからお伺いしますが。

私は1975年にロンドンの建築学校AAスクールを卒業し、'76年から母校で教鞭を取っています。

その卒業の年に応募した日本の建築雑誌の「新建築」国際設計競技で優勝したことが、日本との関係の第一歩です。このコンペの審査員がくまもとアートポリスコミッショナーである磯崎新さんだったというのはラッキーでしたね。この15年前のコンペのことを日本の建築家の方々はよく覚えてくれていて、自分の方がびっくりしています。

ヨーロッパでは私のように実際の建築設計にあたらずに、教職の場に身を置きながら建築活動が続けるというケースは多いんです。ちょうど3年ぐらい前の事でしょうか、伊東豊雄さんが私のいるAAスクールに来て、東京と自分の建築の事についてのレクチャーをしてくださいました。いろいろ話したりしているうちに、私は伊東さんの事務所で働きたいといったんです。そうしたら後

○トム・ヘネガン プロフィール
1951年ロンドンに生まれる/1975年AAスクール卒業後76年より同教授他にロンドン大学、バース大学、東ロンドン工科大学で教鞭をとる。/1990年より安藤和浩、赤星文比古と共に「アーキテクチャー・ファクトリー」を東京に構える。その間数々の国際コンペに入賞する。/主な作品として「レイキャビック・コンサートホール」「ウェイブリッジの住宅」「畜舎のプロトタイプ」などがある。
○インガ・ダグフィンズドッター
アイスランド、レイキャビック生まれ/1985年AAスクール卒業/1985年よりヘネガンとパートナーシップを組む。現在、東京大学高橋研究室研究生。

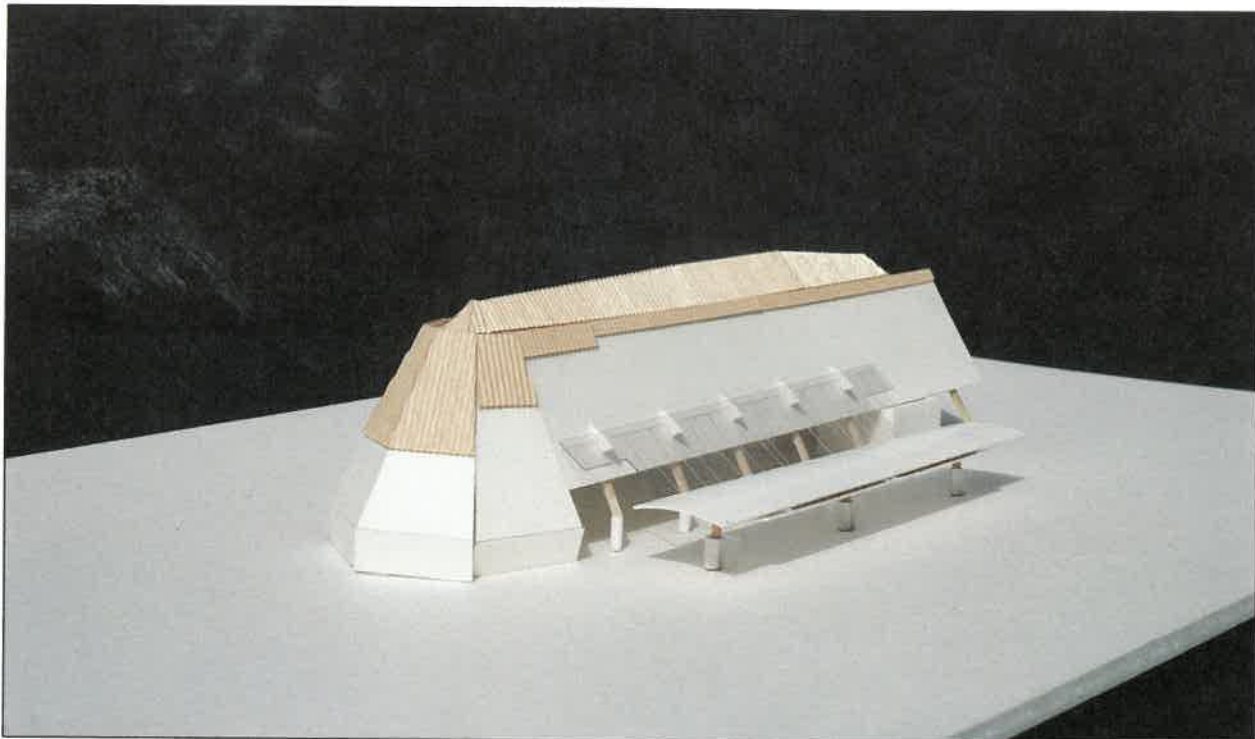
で彼は「事務所の中の机は貸すから、自分で建築家としてやったら?それに仕事はあるだろうから。」という手紙をくれたんです。そしてパートナーのインガが東大の研究生として東京に滞在していることなどが、日本で仕事をしようという動機になりました。

●今回のくまもとアートポリスプロジェクトでは畜産研究所の牛舎と馬舎を担当なさっていますね。特殊な建物だと思いますが、どのような考えで設計にあたられていますか?

まずイギリスにはジョン・ナッシュとエドウィン・ラッチェンズというふたりの偉大な建築家が歴史に残る畜舎を設計しています。だから私たちはこの伝統を継承することができると言えるんです。非常に誇

りに思っています。イギリス人、そしてアイスランド人としてビュリタリズム文化の中で育った私たちはプラグマティックで、機能的で、論理的です。でも機能的というのは美しく、そして際だっていなくてはなりません。英国の建築家はいつもデザインと機能の一致に多大なエネルギーを費やすのですが、時に足枷になってしまうことがあります。でもそんな論理主義を拡大解釈して、逆手にとることでユニークなデザインをすることができるんです。そんなわけで今回の草地研究所はたくさんの機能的な要求があっても、英国流の方法でやるのに相応しいと思います。最初のプレゼンテーションでは、古い民家の例を出しました。民家は強い屋根の形を持っていますが、良く見ればそれが雨や排煙に対す

下/ 草地畜産研究所基本設計段階の模型 大きな勾配の深い屋根とパドックに架けられた軽い紡錘型の屋根のコントラストが特徴的だ



8

るに配慮からのものだし、屋根の上に置かれた石は風で巻き上げられるのを押さえるためなんです。今回のプロジェクトが最終的にちょっと変わった形になるとすれば、それは変わった機能に対する変わった対応によるのです。実は私はロンドンで警察犬の畜舎を設計したことがあります。私は徹底的に機能と要求について検討した結果、今までの畜舎とは変わった形のものをつくりました。でもその建物は使いやすく、清潔で、耐久性のあるものになり、おまけにいつもの建設費より安く上がった。もちろん大変に美しい建築になりました。

●草地畜産研究所で工夫された点は？

まず小牛、乳牛、肉牛の牛舎、そして馬舎の各配置。敷地は起伏ある阿蘇山の外輪です。最初は広大な敷地の手掛かりと、風よけのために長大な土壘を築き、そこに各棟を並べたんです。最初敷地を訪れたとき、霧が深くて1メートル先しか見えなかったんですね。ところがその後壁の変わりをする緑の帯、すなわち木立がずうっと尾根ずたいにあることがわかり、その必要はなくなりました。



上/ ネルソン提督が建設したという、現在は博物館として使われている造船工場 イメージの元になったという

現在の案は敷地の回りの自然の起伏をなるべく活かして配置していますが、一つ一つの棟は同じシステムで作っています。さてその建物ですが、変わった形というよりはその建物の目的を示すように考えているんです。ちょっと屋根の形が動物の背骨に見えるかも知れませんがね。(笑) この屋根は大きなスペースを確保するためのもので、なおかつ中心部が暗くならないように、パドックの浅い勾配の屋根と組み合わせているんです。この紡錘型の屋根は、ちょうどふわりと浮かんだ雲のように

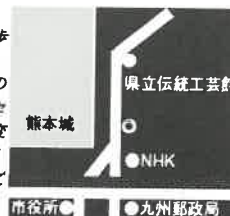
動物たちを夏の日差しからまもります。この形は同時に室内の換気をスムーズにするし、雨水をうまく流すことにもなるんです。形の面白さと、機能性は両方とも大切なことなんです。現在、屋根の材料についてステンレスにするか、シングル葺き(檜皮葺き)にするかを検討を続けています。最後になりましたが、協同で設計にあたってもらっている熊本の桜樹会古川建築事務所の力で日本での仕事が可能になっていることを強調しておきたいですね。(談)

●アートポリス新プロジェクト

旧県立図書館の建築を再利用する
熊本県立美術館分館
設計 ラベリニャ アンド トーレス

旧図書館は外壁タイルの剥離等から現在は使われていないが熊本の石垣に面する景観の一部として親しまれている。今回、我が国で珍しい近代建築の再生を試みられる。担当は歴史的建築の再生を得意とするスペインの建築家2人。改装前とその後を比べてみたら？

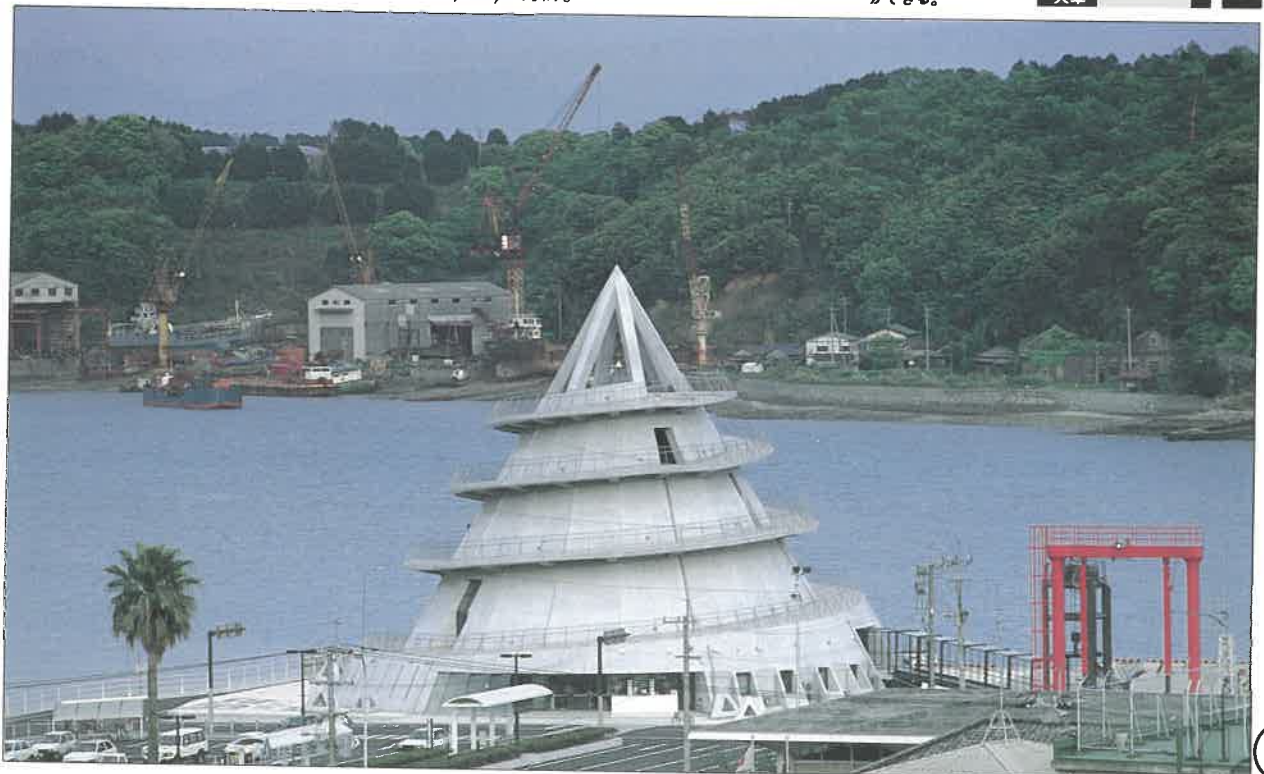
●見学案内
熊本城石垣にそって歩いたNHKならび。セッション風の縦長の窓割りが特徴。パルセロナの味付けでどう変身するか?現在は内部には入れませんのでご注意ください!



●アートポリスプロジェクト案内
三角港フェリーターミナル
設計 葉祥栄

ユニークな外観で親しまれているフェリーターミナル。たちまち三角港のシンボルとなってしまった。明治の港と町並みが息づく三角西港と共に散策するのはいかが?新鮮なシーフードが売り物のレストランは「シーフード香草焼ステーキ」(¥1,500)が好評。

●見学案内
熊本市内より国道57号線を車で60分。JR三角線三角駅前。島原へのフェリーは約1時間毎に出発。運賃は830円。レストラン、売店などがあり、見学の合間に休憩ができる。



9

04

追悼 緒方理一郎氏

●くまもとアートポリスプロジェクトの熊本市営新地団地の設計を担当されていた緒方理一郎氏が9月12日肝臓ガンのため逝去されました。懐かしくお祈りいたします。

緒方理一郎さんを偲ぶ

上田憲二郎
(新地団地設計JVを代表して)

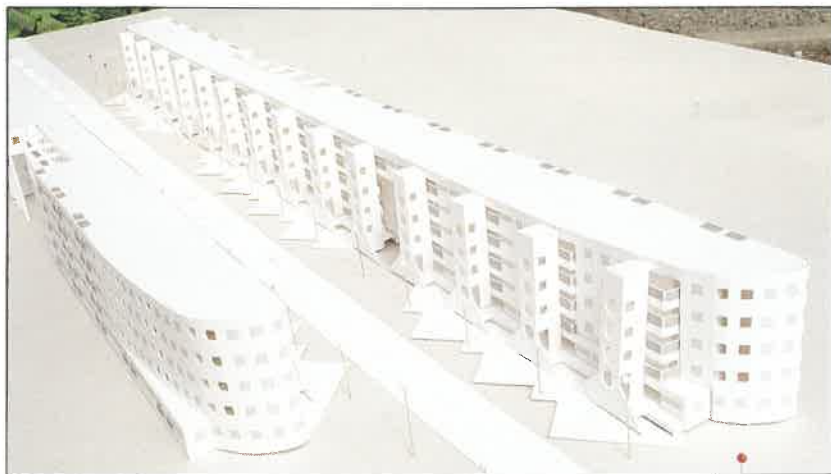
1990年9月12日夜、緒方理一郎さんが亡くなりました。48歳でした。緒方さんはくまもとアートポリス計画のひとつ熊本市営新地団地第二期設計を担当されていました。工事は本年末に着工予定ですが、残念ながら間に合いませんでした。

この計画は5人の設計者の協同作業であり、熊本と東京で20回以上の打ち合わせを行なって出来上がってきたものです。あのいろいろな議論の場面が、今また思い出されます。最初の案は緒方さんが出されたもので、不思議な曲線でした。そのイメージは、現在の案全体にも残っています。

緒方さんは熊本では非常にユニークな存在でした。特別な組織には一切入らず、独自の活動を展開しました。建築界の枠をはるかに越える幅広い分野の人間関係を作り上げる人でした。人間都市くまもと展、熊本の上通商店街の計画、人吉の東九日町商店街計画、ガウディ展などなど、熊本中の文化人が参加した数多くのプロジェクトは彼の強力な個性なしには成立し得ないものでした。このように広い分野で数多くの人たちをまとめることができる素晴らしい人間性がありました。しかし、個人としての設計活動は、逆に徹底した個の世界を持っていました。ビル建築や店舗などの他に、100を超える住宅群を熊本に残しました。その図面は非常に詳細なもので、図面枚数も多く、しかも本人がほとんど一人で描き上げたものでした。同時に数



在りし日の緒方氏



熊本市営新地団地 基本設計時の模型

多くの仕事をやらず、ひとつを完了してから次に取り掛かるという完全主義を守りました。熊本市内の現場には毎日自分自身で出掛けていきました。もうあのニコンの、ジョギングの、自転車の、ボルボの緒方さんを見ることはできなくなりました。新地団地が最後の遺作となりました。新地団地設計JVは、残されたあなたのスタッフと共にこの遺作を完成させたいと思います。



今年になって竣工した住宅

●参加プロジェクトリスト (1990年10月現在)

| プロジェクト名 | 設計者名 | 作業過程 | 完成予定 |
|-----------------------|----------------------------|---------|--------|
| 熊本北警察署 | 篠原一男+大宏設計事務所 | 建設中 | '90.11 |
| 県営保田窪第一団地 | 山本理顕 | 1期完了 | - |
| 加久藤トンネル換気所 | 小山明+バシフィックコンサルタンツ | 竣工 | - |
| 三角港旅客上屋 | 葉祥栄 | 竣工 | - |
| 八代市博物館 | 伊東豊雄 | 建設中 | '91.03 |
| 熊本市公衆便所(花畑公園) | 大塚豊一 | 竣工 | - |
| 熊本市公衆便所(江津湖公園) | 日田兆 | 竣工 | - |
| 熊本市営新地団地A | 早川邦彦 | 建設中 | '91.03 |
| 熊本市営新地団地B | 緒方理一郎 | 実施設計中 | |
| 熊本市営新地団地C | 富永譲 | 実施設計中 | |
| 熊本市営新地団地D | 西岡弘 | 実施設計中 | |
| 熊本市営新地団地E | 上田憲二郎 | 実施設計中 | |
| 県道橋景観整備 | 倉俣史朗+高木富士川計画事務所 | 計画完了 | |
| 熊本市営託麻団地 | 坂本一成+長谷川逸子+松永安光 | 実施設計完了 | |
| 山鹿市光のまちづくり計画 | 岩崎敬+瀬口英徳 | 基本計画完了 | |
| 牛深港架橋 | レンゾ・ピアノ+ピーター・ライス+岡部憲明+前田設計 | 設計中 | |
| 県営帯山A団地 | 新納至門 | 実施設計中 | |
| 玉名市地域総合センター | 豊田文生(基本構想) | 基本構想策定中 | |
| 湯の香橋 | 岸和郎 | 実施設計中 | |
| 清和村文楽館 | 石井和紘 | 実施設計中 | |
| 風土記の丘資料館 | 安藤忠雄 | 建設中 | |
| 球磨工業高校伝統建築実習棟 | 象設計集団 | 実施設計中 | |
| 鮎の瀬大橋 | 大野美代子+中央設計コンサルタンツ | 設計中 | |
| 公園ファニチャーデザイン、同整備マニュアル | 沖健次+東京ランドスケープ研究所 | 設計中 | |
| 松島町下水処理場管理棟 | 斉藤宏 | 実施設計中 | |
| 石打ダム管理棟 | 青木茂 | 建設中 | |
| 県営新渡鹿団地 | 小宮山昭 | 実施設計中 | |
| 大津町第2庁舎および町民集会施設 | 鈴木了二 | 実施設計中 | |
| 玉名市ふるさと展望館 | 高崎正治 | 実施設計中 | |
| 大甲橋景観整備 | 倉俣史朗 | 設計中 | |
| 草地畜産研究所牛舎 | トム・ヘンガン+桜樹会・古川建築事務所 | 基本設計中 | |
| 再春館製菓所女子寮 | 妹島和世 | 実施設計中 | |
| 県立美術館分館 | ラファエル・アラゴ+トリス+大和設計 | 基本設計中 | |
| 湯前町まんが美術館 | 桂英昭 | 基本設計中 | |
| 県営住宅竜蛇平団地 | 元倉真琴 | 契約準備中 | |